

尻焼温泉探訪記

たなか踏基

私の高校時代の同級生、筆名アングルさんこと高橋昭一君が、群馬県の尻焼温泉へ行ってみないかと誘ってくれたのは、安曇野取材の帰途、彼が運転の車の中での話だったように記憶する。

群馬県は、確かに温泉大国である。草津、伊香保、水上等古くから世に知られた名湯が多い。尻焼は寡聞にして聞かぬ温泉であった。高崎市の岩鼻の研究所に十数年勤務していたのに、そんな温泉の記憶は全くなかった。私は「奇妙な異星人」を目下執筆中で、原稿用紙換算で丁度270枚程書き進んでいた。予定では300枚強の推理物に仕立てる積りであった。図らずも七月下旬、筆を置き思案中の所へ、取材兼ねたその誘いが廻ってきた。前日まで日本列島に梅雨前線が停滞し、九州地方には長雨の洪水被害が報道されている折で、雨中旅行を覚悟し合羽を用意した程だった。何と新幹線で上田駅下車の頃、恨めしかった雨がすっかり上り、梅雨明けの如き晴天となっていた。

アングルさんの上田の友人、筆名ダヴィンチさんと昼食後、群馬県六合村を車で目指す。上田を午後一時に発ち、キャベツ産地の嬬恋村、吾妻鉄道を右脇に見て長野原、六合村の尻焼温泉をやり過ぎ、R405を登り三時間で野反湖に着く。

野反湖は、標高一五一四m、周囲十二kmの湖で、日本で一番高い所にある人造湖である由。この標高は、北アルプスの玄関口、河童橋のある上高地に匹敵する高さである。野反湖富士見峠休憩舎(通称花の駅)のある駐車場に着き、車を降りると風が爽やかで、思わず長袖をだして羽織る冷気である。丘陵地から見下ろすと、陽光に湖面を輝

かせる野反湖がある。水力発電用にと、東京電力により昭和三十一年(一九五六)、ロックフィルダム方式の人造湖として造られた。その眺望は、人造湖とはいえ素晴しかった。新潟・長野・群馬の三県の県境に跨り、湖水は魚野川、秘境秋山郷(長野県下水内郡栄村)を経て中津川、津南町から千曲川、やがて信濃川に合流し日本海に注ぐ。

塩沢生まれで「北越雪譜」著者の鈴木牧之が、明和七年に始めて秋山郷を訪ねている。珍しい風俗習慣を絵と文章で纏めた紀行文「秋山紀行」は著名。野反湖周辺のお花畑に、ノゾリキスゲ、シラネアオイ、コマクサ、イワカガミ、レンゲツツジ、ノアザミ、コバイケイソウ等が可憐に彩りを添え、盛んに鶯と鳴き交わす。ハイキング客、キャンプの中学生の姿がロッジ付近にみられた。

野反湖を後にして、宿泊予定の尻焼温泉まで下る。長笹沢川の畔のホテル光山荘に着く。川床から源泉が湧出する尻焼温泉は、全国的にも珍しく川そのものが大露天風呂になる。何故この川床から熱い源泉が湧くのだろうか?谷違いに草津温泉があるので、地下泉脈が通じているに違いない。

宿の女将が、生憎と長雨により水嵩が増え、川床の露天風呂は危険で楽しめないと忠告した。何しろ相手は自然の中の温泉である。そんな状況下でも、長笹沢川岸で露天風呂を満喫できるようにと、電灯もない簡易浴場が設けてあった。日のある内に粗末な仮小屋で脱衣し、川面眺めて露天風呂の湯に浸かる。沢山の観光客が訪れていれば、フルチンは躊躇った所であろうが、先客は僅か三人、男同士裸の付き合いの熱い湯を共に愉しんだ。

昔、人々は川底の石に腰掛けて座浴し、痔の治療をしたら尻が焼けるほど熱かったことからこの名が付けられた由。通常なら、水着姿の女性

客が、水遊び感覚で露天風呂を愉しむ姿が見られると聞いていたが、生憎そんな姿も無く、唯川面に激しく音を立てて水流が渦巻いていた。三人で夕食時に、ビール、日本酒と焼酎のボトルを一本開けた。一泊後、同じ道を下り、鬼押出し有料道路方面に逸れ、昔訪れたことのある懐かしい場所を訪れた。入園料六百元を支払う。

世界三大奇勝の一つと称される鬼押出し園は、天明三年(一七八三)浅間山噴火で生まれた、溶岩大地で、そのまま冷えて岩海となつて固まつたものである。火口で鬼が暴れて岩を押し出したという、当時の人々の印象が、名前の由来の由。浅間山観音堂を中心に、表・裏参道を廻る。犠牲となつた霊を供養のため上野寛永寺の別院として聖観世音菩薩が祭つてある。昔何度か此処に来たことがあつたのだが、当時の記憶が薄れて定かでない。

白糸の滝有料道路、草軽電気電鉄の軌道跡の由、浅間山樹海に貯えられた地下水が、高さ三mの崖の中央から数百の糸状に染み出している。富士山麓にも同名の滝があるが、軽井沢のものは、規模は小さいが優雅で箱庭のような綺麗な滝である。アングルさんの口から、日本初のカラー映画「カルメン故郷に帰る」の話がでる。この映画に浅間山と共に草軽電鉄の高原列車も映っている由。軽井沢の小学校に居たアングルさんが、お仲間と浅間山を何処から撮影したか議論した由であった。

軽井沢銀座で食事をして、一路上田駅まで戻る。今回は、取材というよりは、珍しい場所を訪れた車で廻る駆け足の小旅であった。運転のダヴィンチさんに礼を述べ、アングルさんとも再会を約して一人新幹線の客となった。今回取材を、作品にどう生かすかまた楽しみである。

了